
ウタ × カタ

フライデー・ピンク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウタ×カタ

【Nコード】

N2706R

【作者名】

フライデー・ピンク

【あらすじ】

第二次大戦後

日本は拡大に技術が発展し
平和でのどかな国となった
しかし戦前と比べ勉強にたいし
消極的な子供が増加し
日本政府はあることを考えた
戦闘学：ユーラシア大陸周辺のみ
に実施されている

心を映して武器を創る
ある分子を結合させて
魔法を放つなどの戦闘術を
学びの一つにした

案の定、勉強に興味を持った
現代の子供達
だがそれには裏があり？

現代を舞台に描く
悲愴なバトル小説

ウタ×カタ（一卷）（前書き）

ども、ペーパーの

フライデー・ピンクです

デビュー作で不出来ですが

見ていてください…（ハ・ハ・

ウタ×カタ（一巻）

十花郎の日記【明日から高校生】

【明日から

俺は中学を卒業して高校生になる。

俺は中一の時から

ある 一つの高校に行きたかった。

そして結果、俺は受かってやった。

明日はその学校の入学式だ

入学式はダリイけど明日からの事が楽しみでならねえ】

- - - - -

第零章【夢映シノ陽炎】

『はぁーあ…ダリイ』

『あなたが灰崎 十花郎君？』

『ん？ああ…』

『そつかぁ…よろしくね？』

『？…ああヨロシク』

『ここまできてお前と一緒に…』

『あれ！？周弥！？えっなぜ？』

『なぜもなにも、僕等もここの生徒だよ』

『ん？…おお！圭介も！？』

- - - - -

第一章【消火した夢現】

- チュンチュン -

「っ…………ふぁぁー…」

―がば―

「……………随分、変な夢見たな」

俺はだるい体を起こし時間を見た

- 08:15 -

「……………やべえ!!!」

このままでは確実に遅刻する時刻
即座に寝間着から制服に着替え
冷蔵庫から昨日コンビニで買った
サンドウィッチを取り家を出た

- - - - -

第二章【開幕せし現実】

「ハアハアツ…ハツ」

クソツたれ!

なんつーこった

目覚まし時計セットしとけばよかったぜ

「ゼエ…ゼエハア…」

結局、俺が着いたのは2分遅れだった

あ?どこに着いたのかって?

そりあ…

「…です。そして今年もここ 桜流宮学園 に生徒が来て、よかったです。これからは私達と学び、よい学園生活を作りましょう。」

そう…俺はこの学園に

自己推で入学した新入生

そして今日はその証の入学式だ

…しかし

「めんどくせえ…」

- - -

それから30分経ち入学式は終わった

俺が一番最後に着いたため

一番扉に近かった

「あゝ疲れた…さつさと帰るかあ」

俺は即行に立ち上がり

途中コンビニに寄って帰った

「明日はクラス発表か…」

俺は風呂に入り

自室で今日コンビニで買った

おにぎりを食べながらそう呟いた

……………

「今日はもう寝るか…」

俺はとりあえず

今日の疲れをほぐすため

目覚まし時計を06:00にセットして寝た

- - -

第三章【具現した夢】

- ジリリリ ジリリリ -

「ンン…」

俺は騒音を止め

大きく伸びをし

早速制服に着替え

朝メシにピザトーストを食べた

- 06:45 -

この調子だと全然間に合うじゃん…

そんなことを思いながら

俺は学校へ向かった

学校に着いたら

校門に先輩とメガネ教師（男）が座っていた
その先輩は受付係のようで

俺に話し掛けてきた

「新人生か？」

「ああ」

俺がそう返事をする

隣のメガネ教師が言った

「ああ……か」

「あつ……ワリイ」

「……………」

「……………」

しばらく沈黙が続くと

受付係が口を開いた

「名前は？」

「灰崎 十花郎」

「灰崎、灰崎……1年3組だ」

「おう。分かった」

「……地図だ」

「サンキュ」

「……………絡まれなければいいが」

今の受付の二人……

雰囲気と目つき恐え！！

「……でも、そこなくっちゃな」

と、俺は笑った

そして教室の前につき

・ガラガラッ・

と、勢いよく戸を開けた

その時

「…おいおい。この期に及んでお前と一緒にかよ…？」

あれ？似た様な言葉どつかで…

っ！？まさか！！

「周弥！？」

「ハハハ…僕もいるよ」

「け…圭介もかよ…」

「僕だけ『！？』じゃなくて『…』なんだ…」

「ああ」

「即答！？」

「あたりめえだろ…？」

「…（泣）」

「……………」

別に厭って意味じゃねんだけど

こつも正夢になると、なあ

そうしてしばらく黙っていると

「君、座って座って」

そう先生が言ってきたので

「ああ…わりいわりい」

と軽く返事をして着席した

まさかな…

俺は少し嬉し…いやショックだった

そして、数分後、全員集まったとき

「全員揃ったので自己紹介をします。私がここ、1年3組の教師の

安部 厚子 と言います。よろしくお願いします。」

そう言って丁寧にお辞儀をしていた

「えー…あと10分くらいで 被服室 に向かいますから5分前に

は廊下に並んでおいってください。」

その言葉だけで

俺のモチベーションは上がった

あ？何故かって？

そりゃあここ桜流宮学園は

ただの学校じゃねえからな

そう桜流宮学園の正式名は

桜流宮 戦闘学専門学園 だ

戦闘学！！、専門学園

そう…いわば、喧嘩学園だ！（↑間違い）

— 30分後 —

「次…灰崎 十花郎」

そして、いよいよ俺の出番がきた

「はい」

俺は丁寧に返事をし、部屋へ入った
するとその前にいたのは

「じゃあ、武器を見せてくれるか？」

校門で受付をしていた先輩だった

「分かりました」

そのおかげで緊張が少しほぐれた
理由はなんとなく

「ほう…巨断剣か…」

「はい」

「…よし、もういいぞ」

この言葉で俺の緊張は全てほぐれた

「そうか、んじゃな」

俺は手をひらひらさせながら
被服室を後にした

- - - - -
第四章【予言した夢】

武器点検も無事終わり

廊下を歩いていると

「灰崎君…なの？」

あどけない感じで俺を呼ぶ声がした
声的に女子だろうが

俺の旧友にこんな声のヤツは

いなかったと思うんだが

でも、なんか聞き覚えがあるな…

なんやかんやで、声の主が気になったので
声のした方へ向いてみた

「俺が灰崎 十花郎だけど？」

「よかった♪」

そう言つて

近づこうとして歩きだしたと思ったら

- ドテツ -

「あう！」

凄いくらい綺麗にこけた

「……………」

「うう…（泣）」

「……………うわぁ…」

俺はこの気まずい空気を無くすべく

咄嗟に話を振った

「そーいや、俺に用か？」

実際なぜ呼ばれたのか謎だった
するとその女子は

「えっ!？」

と、驚いていた

頭打って記憶が飛んだか？

そんなことを思いながら再度確認した

「いや…呼び止めたじゃん」

「まあ…うん…」

次は返事をしたが、歯切れが悪い

が、俺は気にかけることなく質問した

「何だよ用事は？」

「えっと…灰崎君は喧嘩強いんだよね？」

「……………」

もしかして、絡まれたのか？こいつ…。

自業自得って言ってやりてえけど

調度良いって言えばいいからいつか

「灰崎君？」

「まあ強えけど…」

「そつかあゝそれじゃあ、ちょっとついて来て欲しいんだけど、いい？」

「…ああ。いいぜ」

そういつて連れてこられたのは

なんと木材室だった

「はい、これ」

そして渡されたのは

馬鹿でかい木材

「…は？」

喧嘩の強さ で引き止めた

意図がわかんねえー！！！！！！

「？ど、どうしたの？」

「俺…」

やらねえからって言いかけたが

初対面の俺に頼んできたってことは

俺がここで逃げたら

コイツはまた人探しからになるだろう
しかも女子一人にこんなの任せるほど
俺は鬼畜じゃない

「???なに?」

「えーつと…どこに運べばいいか分かんねえけど?」

「あつ! えつと南グランドだよ」

「……………(汗)」

「それじゃあよろしく!」

「いやいや! 正気かよ! ?」

「いや、さすがにめんどく…!」

「ドカツ」

「さつつ痛つてえ!」

いきなり後ろからの衝撃

「ずべこべ言つてねえでさつさと運べ」

正体は周弥だった

「周弥てめえ…?」

危うく足の小指に

落とすところだったじゃねえか!

一回フルぼっこにしてやる

「パーソニファイ(具現)!!」

「ちよつ、よしなつて」

「ああ? 圭介は黙つてろ!」

「いや、夜水ちゃん困つてるよ?」

「……………」

「……………」

「…夜水つて誰?」

不意に出てきたその名前に

?マークが並んだが

正体はコイツだった

「えッ? その娘だけど」

「ああ…お前、夜水ってんだな」

「北世 夜水です！よろしくね」

あれ？この感じ…

「マジかよ…」

「「「???」」」

俺は夢に予言されたのかもしれない

この女子も夢に出てきてたヤツだ

さっきの『よろしくね』でわかった

俺は武器をアーシミリション（消化）し

巨大木材を持った

「わかった…運んでやんよ」

「「何故!？」」

「ありがとう」

「別に…」

「」

「んだよ？」

「うっん あっ！じゃあ周弥君達はこれ」

「あいよ」

「わかった」

そして数時間後…

「あゝ疲れた」

結局俺以外にも

何人か手伝っていやがった

ちくしょー、断ってたぜ

もともとやる気なかったし

などと考えていたら

いきなり冷たい感覚が右の頬に走った

「っ!？」（びくう!!）

「はい」

すると夜水が

ドリンクを持って隣にいた

「お…おう、サンキュ」

俺は渡された三ツ矢サイダーに

口をつけた

その時

「そっち、あたしの…」

何iiiiiiiiい!?

「わ、わりい!!」

「いや!!…大丈夫!口つけてないから」

「でもお前のは?」

「灰崎君用の三ツ矢サイダーが残ってる」

そう言つて

右手のドリンクを見せてきた

「変わんねえじゃん!!?」

「変わるよ!そっちカロリーゼロだもん!」

「しらねえよ!!」

「…まあ三ツ矢サイダーならなんでもいいんだけどね」

「じゃあいいじゃねえかよ!」

「あつ!そつかあ」

「……………」

何なんだ?

このつるみにきい不思議女子は??

・ガラッ・

あつ、安部コーが入ってきた。

そして周弥を見るや否や

「あら、周弥君と圭介君と夜水さんは、木材の移動もう終わったんですか?」

「ああ…俺達三人は最強だからな」

そう淡々と嘘のAnswerを答える周弥

「それはさすがに無いでしょう？」

それに疑問を抱く安部コ

「そうだな」

真顔で即答する周弥

「では何故終わっているのですか？」

もう一度質問する安部コ

「俺達は不可能を可能にでき…」

「他の生徒が手伝ってくれたんです」

周弥の不明な言い訳を

割って入って答える圭介

「そうですね、ありがとうございます。圭介君」

圭介に礼を言う先生

「いえいえ」

それに対し愛想笑いをする圭介

こいつら中学ん時と変わってねえな…

しかも場の流れすら

そして、安部コは話を戻すかのように

「今日はもう授業はないので解散。」

と言ったので

俺はソッコー帰る準備をし始めた

「おい灰崎、俺達は置いてけぼりか？」

「あ？一緒に帰んの？」

「十花郎君はひどいなあ、家まあ近いし中学の時は一緒に帰っ

てたじゃないか」

「んじゃ帰つか」

「ああ」「うん」

帰り道の途中

ゲーセンで遊びながら話していた

「にしてもお前らが戦闘学専門校、受かるなんてな、ビックリだぜ」

「アハハ…きつとマグレだって（笑）」

そう言つて自重する圭介

「ナメんじゃねえよ」（スパー）

そう言つてタバコの煙りをはいてくる周弥

「臭っ！！何しやがる周弥！！」

「……」（スパー）

「シカトかゴラァ！！」

「あんま騒ぐなつて、皆見てるぞ」

「なっ！？」

「ンなわけねえじゃん、ここゲーセンだぜ？」

「こゝいゝつゝ…」

「じゃあ、あのリッジレーサーで勝負だ！！」

「ああ、いいぜ」

…数時間後

家についたときには

俺はもう精神的にクタクタだった

「……………負けた」

そう俺は全敗した

「あゝうぜっ！もう寝よ」

ムシャクシャした俺は

シャワーを浴びて即行眠りについた

- - - - -

第五章【年上の雰囲気】

「ンン…ふわああ…ふう」

俺は普通に起きたが

問題の時間は…

- 08:30 -

「は？」

…致命的だった

「もう授業始まる時間じゃねえかよ!!」
だが俺は高校からは学習し

こつという時のために

ウイダーを買っていた

即座に制服に着替え

ウイダーを搔つ攫い家を出た

- ガラツ!! -

「遅れた! ワリイな安部コ」

軽く謝る俺

「ああ？」

返ってくる、いかつい声

「あン？」

見てみるとそこには先輩方(?) がいた

「なんだなんだあ? そのふぬけた返事は？」

「いや…何でもねえ」

「何でもねえだあ？」

「そこらへんで止めておけ…」

「いいやコイツは、後輩なのに喧嘩売ってきたぞ!!! 挑戦状だあ！」

「いつ喧嘩売ったよ……」

「何だ? コイツの態度!？」

「……………」

めんどくせー

何だよこの先輩

「くれぐれも、後輩には優しく接しろと言っただろうが」
さつきから注意してんの誰だ?

そうふと思ひそいつの方を見てみた

あ…この人、受付してたヤツじゃねえか?

そして受付してた先輩の言葉で

隣の女二人が喋り始めた

「……だからボクは、最初に無駄って言ったでしょ？」

「そないに言わんでええんとちやいます？」

すると次はそちにキレたのか

俺をガン無視して先輩方の方へ向き

「どいつもこいつも…俺をバカにしてんじゃねえぞ！！？パーソニ
フィ（具現）！」

…ブワァ！！…

そう風を切る音がなったと思ったら

「…白呪第二条《禁》」

「ぐあ！！」

『…すげえ』

俺は…いや俺達は

自然とそんな言葉が出ていた

何がおきたのかわからなかった

「クソが！！千裕、これ解きやがれ！」

「駄目だ」

あんな殺気のこもった言葉を

もろともせず拒否した千裕

「何だとお！？」

「1年3組の後輩達、今ここにいる俺達が
2年団代表の四人…」

「利根川 董 や、よろしゅう」

「船越 雪音」

「庵谷 次三 ……だあ」

「そして俺が 清透 千裕 だ」

一通り自己紹介がすんだ

と思ったら

「…よろしくな 利根川 董」

「ふふふ…よろしゅう」

周弥がそんなやり取りをしていた

「では、これからは戦闘学に励んでくれ」

「パーン」

「クソが！やつと解けやがった」

そんな安直の様な言葉をぼやきながら

庵谷 次三は教室から出ていった

そして先輩方が全員出ていった後
ソッコー周弥の下へ行き

即質問した

「さっきの董って人知り合い？」

そして返答は驚くものだった

「いや、知らねえけど」（スパー）

「えっ？」

「何だよ？」

「いや、さっきそいつにだけ挨拶したじゃん」俺が質問の視点を変えてみた

「ああ、それは…」

そこで一端タバコを吹かし

「董が保健委員長だから」

俺は意味不明な返答に

もつとわけが分からなくなった

「いや…はしよりすぎたろ」

「何もはしよってねえけど？」

「マジで？」

「あつ、はしよったといえば、はしよった」

「そこ教えるよ」

「俺、保健委員入るから」

タバコを吹かしながら

そんなことを言ってきた

「「なんか意外」」

誰かも同じ意見を持っているみたいだった

「何だよ、北世も意外って」

「お前と同意見かよ!？」

「ふふ」

俺は何かを殴りたい気分になった

そしたらさっきまで黙っていた

圭介がもつともなことを言った

「けど夜水ちゃんが戦闘学専門学園にいるのも、意外だよな」

「確かにな」(スパー)

「勉強学の方で受かったんじゃないのか？」

「うっん、戦闘学で受かったよ」

「「そっちの方が意外だよ!」」

俺達三人は口を揃えて言った

「そうかなあ...？」

本人だからわからねえ事って

あるもんだよな

そして放課後になり

家に帰った

今日は朝からいろいろ変わった事が起きて
いままでで1番

疲れた日だった様な気がする

「高校って、スゲー疲れるんだな...」

俺はいつの間にか眠りにについていた

二巻に続くぜ！ by 灰崎 十花郎

そう言いながら

抱き着こうとする夜水を

俺は片手で制止させる

「毎度毎度、よくこりねえな」

もう俺が入学して二ヶ月が経つ

そのためこんなにも

夜水と仲良く(?) なっている

…いやなっってしまった

俺はなぜ、こんな関係になったのか

全然わからない

知り合いになるきっかけって

よくよく考えねえと

忘れ去ることが多い…

そのことを俺は高校生活で大きく実感した

- キーンコン カンコーン -

それからしばらくして

ホームルームのチャイムが鳴った

- ガラツ -

安部コーがそれと同時に入って来た

「えー、今日は一日、 実力見定め授業 ということです。今から誰がどこに行けばよいかを先生が言いますから、きちんと聞くように」

安部コーが言っていた

実力見定め授業 てのは

幾つかの試練を出して

今年の一年生の実力を

先輩(二年生)の代表が

見定める授業のことだ

そして、これが

夏の合宿に大きく関係ある

安部コーが言った結果

俺は訓練場【漆風】

周弥は、訓練場【天舞】

圭介は、訓練場【冥國】

夜水は、訓練場【夢幻】

「つーか、試練ってどんなのなんだろ…」

俺は 実力見定め授業 の試練が
どんなモノなのか楽しみだった

そして俺は指定場所についた

「君はこの人選ばれた人か？」

メガネをかけた受付（教師） が聞いてきた

「ああ」

俺は軽く返事をした

「そうか、なら入れ」

そついいながらメンバー表を渡してきた

ここの試練者はこんな感じだった

1年3組生徒：俺

1年1組生徒：黒崎 森之信

1年2組生徒：九澄 由

1年4組生徒：赤羽 瑠璃

1年5組生徒：阿久津 要…ほか

まあざつと20人はいた

その中の

俺と固めてあつた奴らがこいつらだった

けど、他の奴らは固められていなかったのが少し疑問になったから
隣の奴に聞いてみた

「なあ、このまとまりって何なんだ？」

「うーん…定かでないけど…一番最初に書かれてて、クラスに一人ずつだから…この中で一番期待できる人達何じゃないかな？」

「…なるほど、やっぱり俺は期待される人材なんだな…クッククク」
定かでないと言われた答えだが

俺は優越感に浸っていた

「へえ、君も その枠の人なんだ」

君も？てことはこいつもか？

「お前、名前何てんだ？」

「名乗るときは自分から…習わなかったの？」 「…灰崎 十花郎だ」
習わねえよ！そう思ったが

試験前に喧嘩をして

試験落ちは嫌だったので

ここは普通の対応をした

「僕は、阿久津 要よろしくね」

「お…おう、よろしくな」

コイツ…さっぱりした奴なのか

うざってえ奴なのか分かんねえな、こいつ

- キーンコンカーンコン -

「今から 実力見定め授業 を開始します」

「始まったみたいだね」

「ああ、だな」

こうして実力見定め授業が始まった

が、一つ質問があった

「これは、どういう順番で試験を受けるの？」

と一人の女子が質問していた

「その紙の順番通りだ」

「そう、だったらウチは4番目みたいね」

4番目ってゆくと

俺達の粹じゃねえか

「あいつが赤羽 瑠璃か」

「みたいだね」

つて一番目俺じゃん！！

「さあて、行つてくつか」

「せいぜい頑張りなよ」

「はっ！楽シヨーだよ楽シヨー」

そうは言つたが

実はものすごく緊張していた

- - - - -

第七章【厳しき試練】

- ギィ… バタン -

「暗らくて、なにも見えねえじゃん」

どこを見ても暗闇が

無限に続きそうなくらいだ

「武器は構えなくていいのか？」

どこからか、そんな声がし

とつさに心映武器をパーソニフィ（具現）した

- パアン -

「それじゃあ、始めだな」

「1ミツシヨーン…開始」

- ビュンビュン -

なにかが飛んでくる音がした

俺は二歩下がって回転斬りをした

するとたまたまそれがあたり

ガキーンと音をたてて

元々見えねえけど消えていった

「チッ！」

「パッ」

「うわっ！？眩し！！」

突然視界が明るくなった

「…すげえ」

中は体育館よりでかい空間だった
まあ訓練場だからコンクリ固めの
設計である

「2ミツション目だ！！」

「2ミツション開始」

「クソが、休む暇は与えねえってか？」

そう傍観室を睨みつけていると
放送音が流れはじめた

「ピンポンパンポン」

「これから三分後、千本の針が飛んできます。呪法、魔法、妖術な
どで防ぎなさい。」

…はい？

「俺の超苦手分野じゃん…」

俺はこの通り

呪法、魔法、妖術という

普通の勉強より覚えるのが難しい

頭脳系戦闘方法は大嫌いだった

そのため発動出来るのも、ごく僅か
それに綺麗には発動出来ない

「あと二分」

「だけど、俺がこんなところでアウトになってのこの二クラスに戻っ
たら…」

（大丈夫だよ 十花郎君が頭悪いだけ♪）

（俺はそれ、楽シヨーだったけどな）

（アハハ、僕と仲間だね）

こんなのは、ゴメンだああ！！！！

「……いいぜ、やってやろうじゃねえか」

あんな地獄絵図見るくれえなら

死ぬ気でぶつかってやる

第一、無理って決まってるわけじゃねえ

「あと一分」

「ハッ……あと一分か」

俺の頭は、意外と賢いから便利だ

「一か八かやってみつか」

昔俺が魔法系統の中で

一つだけ、すげえ練習した技があった

まあそれも結局まともな形で

発動できずに飽きて止めてしまった

けど、これだけ詠唱も覚えてる

「未開の扉 届かぬ足音

黒く染まりゆくは紅き薔薇

血潮に誘われしは 千年の旅人」

「残り5秒、4、3、2、……」

「万物を滅せ……」

「1、……0、発射」

「魔法律第三十二項《灼水花》！！！」

・ボガーン！！！！

「出来損ないだが……一年の時点で、三十二項だとお！？」

「ハアハアッ……ハア」

案の定、俺は俺の技で傷を負った

「……クハハ、やるじゃねえか」

「3ミッシヨンのプログラムに変更中」

「やっぱ、即行開始か」

俺は即座に武器を構えた

「プログラム変更完了、3ミッション開始」

・ブオン・

「来るか…って、あン？次三？…てことは…」

「そうだ、ここはプログラム化した俺が最終ミッションに出てくる訓練場だ！」

それを聞いたとたん

俺は自然と笑みがこぼれていた

「ククク…クハハハ！！」

「何がおかしい？」

「…ククク！三分でのしてやるよ」

「言っじゃねえか、三下が」

「ゼエハア…ゼエハア」

「どうしたよ？さっきまでの気合いはどこにいったんだ？」

「うっせーよ、くそプログラムが」

「ハッ！クソはどっちだ？」

もうミッション開始から10分経っていた

「まだ…終わっちゃいねえ」

「スタミナは、あるんだな」

相手はかすり傷が数カ所

俺は左肩から腹部までの斬撃と

かすり傷が数カ所

どう見ても俺の劣勢だ

…けど俺は次三を挑発する

「来いよ…」

「いいんだな？」

「…怖えのか？」

「このっ！三下があ！？」

けど、

「てめえに喧嘩で負けたくねえんだよ!!」

こっちに走ってきた次三の

ムナグラを、俺は武器を捨てて掴んだ

「何の真似だ？」

「…本日二回目だ」

「あん？」

「…未開の扉 届かぬ足音

黒く染まりゆくは紅き薔薇

血潮に誘われしは 千年の旅人

万物を滅せ…」

「やべっ！」

「魔法第三十二項《灼水花》!!」

「ボガン!!」

「ぢっくっそ！」

「…ハア、ハア」

「ナメた真似…しやがってえ…」

「ハアハア…へっ!どうよ?…似た者どうしの…頭脳戦で負けた気分は」

「ちっ…気分がた落ちだあ」

「ヒュンッ」

もう動けねえ…立ってんのがやっとだ

次三の武器の鎖鎌が

俺の肩を引き裂いた

「ブシュ!!」

「く…っそ…」

「3ミッション終了です。」

「……3ミッション目…」

なんか言ってたみてえだが

俺は聞き取る事はできなかった

どうせ負けだと言ってきてたんだろっ
そんなもん、俺でも分かってるよ…

第八章【真実の勝敗】

あれから何時間経ったんだ？

つか、まわりがふわふわしてきた

…暖ったけえ

ハハッ… 血の流しすぎで

温度が曖昧になってんだな

試練敗退どころか、死ぬなんてな…

情けねえぜ…

「だから手加減しろと言っただろっ！」

「ワリイワリイ…」

今更説教か？もう遅せえよ…

ほらあの世への光が目の前に…

「ンン…ンあ？」

「よう…大丈夫か？」

「やあ、生きてて安心したよ」

「周弥…それに圭介も？」

「ほおら、生きてたじゃねえの」

「そういう問題ではない！」

「…っ次三」

さっき俺を倒した次三を、俺は睨んでいた

すると董という先輩が聞いてきた

「気分悪うないか？」

「えっ！？…まあ、はい」

…だきっ！…

「うお！？」

いきなりの衝撃！？

「十花郎君！よかった、生きてたんだね」

たしかに…俺、死んでねえんだ

「ハッ！夜水も皆も心配すんなって！俺は、これしきじゃあ死なねえよ」

「でも心配したんだよ（泣）」

「ギョッ」

「いででで！！ちよつ、やめつ！離れる夜水！マジで…マジで死ぬって！」

「やっぱり、仲いいね（笑）」

「…病人じゃないみたい」

「えらい、仲ええみたいやなあ」

「…………」（スパー）

「どこが仲良しに見えんだよ！？傷口開いて俺死ぬぞ？…ちよつ！誰も止めねえの！？てか止める！」

「アハハ」

「…ボクの力じゃあ出来ない」

「私も…出来ませんえ」

「…………」（スパー）

「オイ！！肝心の保健委員長が怪しい反応！？」

「つか周弥なんか喋れよ！」

「…………」（スパー）

「無視か！？ゴラァ！」

「うるせー、お前回復させるときに、結構精神使ってこっちは疲れてんだ」

返ってきた言葉は

ずごく驚く内容だった

「お前が、回復してくれたのか」

「何だ、不満か？それとも不安か？」

「いやそうじゃねえよ、ただスゲーなって…」「まあな、こんな感じなのが3ミッション目だったからな」

「そうだったのか、クリア出来たのか？」

「ああ」（スパー）

「そうか… すぎえな、俺は…」

落ちたけどな

俺がそう言おうとしたとき

「灰崎 十花郎、お前も合格だぞ…」

千裕がそう言いながら

実力見定め授業合格紙を渡してきた

「なんで… だって俺は！」

「あんな無茶な勝利条件は、嘘だ」

「えっ？」

「次三に深手を負けられるやつは二年の中でも少数だ。だが、そんな不利な状況になってどれだけ賢い行動ができるか見定めさせてもらった結果、お前は合格だ… しかし」

「しかし？」

「これが授業じゃなかったらお前は死んでいた、だから合格ランクはCだ」

Cってゆーと

最低ランクの一個上か

「なーんか… お前らにいいことりさせようと頑張って苦戦したのに… 合格みてえだわ、わりいな」

「だったら安心しろ、俺はBだ」

「僕はCだから安心して」

「私はBだよ」

「らっ… ランクは関係ねえよ！」

「… クスクス…」

「お前ら…？」

「まあまあ、それより夏の合宿楽しみだね僕ら全員合格みたいだし」

「そうだな…」（スパー）

「そだね」

「まあ、そうだな（笑）」

結果俺は合格になり

俺達全員、夏の合宿へ行ける事になった

三巻に続くよ by 北世 夜水

ウタ×カタ（一卷）（後書き）

一卷はこれでおしまいです
二巻でまた会いましょう ノシ

ウタ×カタ (二巻) (前書き)

どうも一日で二作連続です…
よかったら見てくださいなw

ウタ×カタ（二巻）

夜水の日記【新しい友達】

【十花郎君達と話すようになってから

もう一ヶ月が経つけど、十花郎君達と仲よくなってからは毎日が楽しい　^　^

学校から帰ってもメールで話したり（*　^　・　^　*）中学のときの友達とは

離れ離れになっちゃって

友達ができるか、少し不安だったけど

高校で新しい友達ができまし

その友達はすごくおもしろい人達で

学校に行くのが

今じゃ楽しみになってきてる（^　-　^）

高校生活の毎日が

楽しい思い出の1ページになってる♪】

- - - - -

第六章【特別の授業】

- ガラツ -

「よつす！」

「ああ」

「うん、おはよう」

「エヘヘ♪十花郎君、おはよう」

そう言いながら

抱き着こうとする夜水を

俺は片手で制止させる

「毎度毎度、よくこりねえな」

もう俺が入学して二ヶ月が経つ
そのためこんなにも
夜水と仲良く(?) なっている
…いやなつてしまった
俺はなぜ、こんな関係になったのか
全然わからない
知り合いになるきっかけて
よくよく考えねえと
忘れ去ることが多い…
そのことを俺は高校生活で大きく実感した

- キーンコン カンコーン -
それからしばらくして
ホームルームのチャイムが鳴った
- ガラッ -

安部コーがそれと同時に入って来た
「えー、今日は一日、 実力見定め授業 ということです。今から
誰がどこに行けばよいかを先生が言いますから、きちんと聞くよう
に」

安部コーが言っていた
実力見定め授業 てのは
幾つかの試練を出して
今年の一年生の実力を
先輩(二年生)の代表が
見定める授業のことだ
そして、これが
夏の合宿に大きく関係ある

安部コーが言った結果

俺は訓練場【漆風】

周弥は、訓練場【天舞】

圭介は、訓練場【冥國】

夜水は、訓練場【夢幻】

「つーか、試練ってどんなのなんだろ……」

俺は 実力見定め授業 の試練が

どんなモノなのか楽しみだった

そして俺は指定場所についた

「君はこの人選ばれた人か？」

メガネをかけた受付（教師） が聞いてきた

「ああ」

俺は軽く返事をした

「そうか、なら入れ」

そっぴいながらメンバー表を渡してきた

ここの試練者はこんな感じだった

1年3組生徒：俺

1年1組生徒：黒崎 森之信

1年2組生徒：九澄 由

1年4組生徒：赤羽 瑠璃

1年5組生徒：阿久津 要…ほか

まあざつと20人はいた

その中の

俺と固めてあった奴らがこいつらだった

けど、他の奴らは固められていなかったのが少し疑問になったから
隣の奴に聞いてみた

「なあ、このまとまりって何なんだ？」

「うーん…定かでないけど…一番最初に書かれてて、クラスに一人ずつだから…この中で一番期待できる人達何じゃないかな？」

「…なるほど、やっぱり俺は期待される人材なんだな…クッククク」
定かでないと言われた答えだが

俺は優越感に浸っていた

「へえ、君も その枠の人なんだ」

君も？てことはこいつもか？

「お前、名前何てんだ？」

「名乗るときは自分から…習わなかったの？」「…灰崎 十花郎だ」
「習わねえよ！そう思ったが

試練前に喧嘩をして

試練落ちは嫌だったので

ここは普通の対応をした

「僕は、阿久津 要よろしくね」

「お…おう、よろしくな」

コイツ…さっぱりした奴なのか

うざってえ奴なのか分かんねえな、こいつ

- キーンコンカーンコン -

「今から 実力見定め授業 を開始します」

「始まったみたいだね」

「ああ、だな」

こうして実力見定め授業が始まった

が、一つ質問があった

「これは、どういう順番で試練を受けるの？」

と一人の女子が質問していた

「その紙の順番通りだ」

「そう、だったらウチは4番目みたいね」

4番目ってゆうと

俺達の枠じゃねえか

「あいつが赤羽 瑠璃か」

「みたいだね」

「つて一番目俺じゃん!!」

「さあて、行つてくつか」

「せいぜい頑張りなよ」

「はっ! 楽シヨーだよ楽シヨー」

そうは言つたが

実はものすごく緊張していた

- - - - -

第七章【厳しき試練】

- ギィ… バタン -

「暗らくて、なにも見えねえじゃん」

どこを見ても暗闇が

無限に続きそうなくらいだ

「武器は構えなくていいのか?」

どこからか、そんな声がし

とつさに心映武器をパーソニフィ（具現）した

- パアン -

「それじゃあ、始めだな」

「1ミツシヨ…開始」

- ビュンビュン -

なにかが飛んでくる音がした

俺は二歩下がり回転斬りをした

するとたまたまそれがあたり

ガキインと音をたてて

元々見えねえけど消えていった

「チッ!」

- パッ -

「うわっ！？眩し！！」

突然視界が明るくなった

「…すげえ」

中は体育館よりでかい空間だった
まあ訓練場だからコンクリ固めの
設計である

「2ミツション目だ！！」

「2ミツション開始」

「クソが、休む暇は与えねえってか？」

そう傍観室を睨みつけていると

放送音が流れはじめた

- ピンポンパンポン -

「これから三分後、千本の針が飛んできます。呪法、魔法、妖術な
どで防ぎなさい。」

…はい？

「俺の超苦手分野じゃん…」

俺はこの通り

呪法、魔法、妖術という

普通の勉強より覚えるのが難しい

頭脳系戦闘方法は大嫌いだった

そのため発動出来るのも、ごく僅か

それに綺麗には発動出来ない

「あと二分」

「だけど、俺がこんなところでアウトになってのこの二クラスに戻っ
たら…」

（大丈夫だよ 十花郎君が頭悪いだけ♪）

（俺はそれ、楽シヨーだったけどな）

（アハハ、僕と仲間だね）

こんなのは、ゴメンだああ！！！！

「…いいぜ、やってやろうじゃねえか」

あんな地獄絵図見るくれえなら

死ぬ気でぶつかってやる

第一、無理って決まってるわけじゃねえ

「あと一分」

「ハッ…あと一分か」

俺の頭は、意外と賢いから便利だ

「一か八かやってみつか」

昔俺が魔法系統の中で

一つだけ、すげえ練習した技があった

まあそれも結局まともな形で

発動できずに飽きて止めてしまった

けど、これだけ詠唱も覚えてる

「未開の扉 届かぬ足音

黒く染まりゆくは紅き薔薇

血潮に誘われしは 千年の旅人」

「残り5秒、4、3、2、…」

「万物を滅せ…」

「1、…0、発射」

「魔法律第三十二項《灼水花》！！」

…ボガーン！！…

「出来損ないだが…一年の時点で、三十二項だとお！？」

「ハアハアッ…ハア」

案の定、俺は俺の技で傷を負った

「…クハハ、やるじゃねえか」

「3ミッションのプログラムに変更中」

「やっぱ、即行開始か」

俺は即座に武器を構えた

「プログラム変更完了、3ミッション開始」

「ブオン」

「来るか…って、あン？次三？…てことは…」

「そうだ、ここはプログラム化した俺が最終ミッションに出てくる訓練場だ！」

それを聞いたとたん

俺は自然と笑みがこぼれていた

「ククク…クハハハ！！」

「何がおかしい？」

「…ククク！三分でのしてやるよ」

「言っじゃねえか、三下が」

「ゼエハア…ゼエハア」

「どうしたよ？さっきまでの気合いはどこにいったんだ？」

「うつせーよ、くそプログラムが」

「ハッ！クソはどっちだ？」

もうミッション開始から10分経っていた

「まだ…終わっちゃいねえ」

「スタミナは、あるんだな」

相手はかすり傷が数カ所

俺は左肩から腹部までの斬撃と

かすり傷が数カ所

どう見ても俺の劣勢だ

…けど俺は次三を挑発する

「来いよ…」

「いいんだな？」

「…怖えのか？」

「このっ！三下があ！？」

けど、

「てめえに喧嘩で負けたくねえんだよ!!」

こっちに走ってきた次三の

ムナグラを、俺は武器を捨てて掴んだ

「何の真似だ？」

「…本日二回目だ」

「あん？」

「…未開の扉 届かぬ足音

黒く染まりゆくは紅き薔薇

血潮に誘われしは 千年の旅人

万物を滅せ…」

「やべっ！」

「魔法律第三十二項《灼水花》!!」

「ボガン!!」

「ぢっくっそ！」

「…ハア、ハア」

「ナメた真似…しやがってえ…」

「ハアハア…へっ!どうよ?…似た者どうしの…頭脳戦で負けた気分は」

「ちっ…気分がた落ちだあ」

「ヒュンッ」

もう動けねえ…立ってんのがやっとだ

次三の武器の鎖鎌が

俺の肩を引き裂いた

「ブシュ!!」

「く…っそ…」

「3ミッション終了です。」

「…3ミッション目…」

なんか言ってたみてえだが

俺は聞き取る事はできなかった

どうせ負けだと言ってきたんだろう

そんなもん、俺でも分かってるよ…

第八章【真実の勝敗】

あれから何時間経ったんだ？

「っか、まわりがふわふわしてきた

……暖ったけえ

ハハッ…血の流しすぎで

温度が曖昧になってんだな

試練敗退どころか、死ぬなんてな…

情けねえぜ…

「だから手加減しろと言っただろっ！」

「ワリイワリイ…」

今更説教か？もう遅せえよ…

ほらあの世への光が目の前に…

「ンン…ンあ？」

「よう…大丈夫か？」

「やあ、生きてて安心したよ」

「周弥…それに圭介も？」

「ほおら、生きてたじゃねえの」

「そういう問題ではない！」

「…っ次三」

さつき俺を倒した次三を、俺は睨んでいた
すると董という先輩が聞いてきた

「気分悪うないか？」

「えっ！？…まあ、はい」

「だきっ！！」

「うお！？」

いきなりの衝撃！？

「十花郎君！よかった、生きてたんだね」

たしかに…俺、死んでねえんだ

「…ハッ！夜水も皆も心配すんなって！俺は、これしきじゃあ死なねえよ」

「でも心配したんだよ（泣）」

「ギョッ」

「いでででで！！ちよつ、やめつ！離れる夜水！マジで…マジで死ぬって！」

「やっぱり、仲いいね（笑）」

「…病人じゃないみたい」

「えらい、仲ええみたいやなあ」

「…………」（スパー）

「どこが仲良しに見えんだよ！？傷口開いて俺死ぬぞ？…ちよつ！誰も止めねえの！？てか止める！」

「アハハ」

「…ボクの力じゃあ出来ない」

「私も…出来ませんえ」

「…………」（スパー）

「オイ！！肝心の保健委員長が怪しい反応！？

っ！か周弥なんか喋れよ！」

「…………」（スパー）

「無視か！？ゴラァ！」

「うるせー、お前回復させるときに、結構精神使ってこっちは疲れてんだ」

返ってきた言葉は

すごく驚く内容だった

「お前が、回復してくれたのか」

「何だ、不満か？それとも不安か？」

「いやそうじゃねえよ、ただスゲーなって…」 「まあな、こんな感じなのが3ミッション目だったからな」

「そうだったのか、クリア出来たのか？」

「ああ」（スパー）

「そうか…すげえな、俺は…」
落ちたけどな

俺がそう言おうとしたとき

「灰崎 十花郎、お前も合格だぞ…」

千裕がそう言いながら

実力見定め授業合格紙を渡してきた

「なんで…だつて俺は！」

「あんな無茶な勝利条件は、嘘だ」

「えっ？」

「次三に深手を負けられるやつは二年の中でも少数だ。だが、そんな不利な状況になってどれだけ賢い行動ができるか見定めさせてもらった結果、お前は合格だ…しかし」

「しかし？」

「これが授業じゃなかったらお前は死んでいた、だから合格ランクはCだ」

Cってゆうと

最低ランクの一個上か

「なーんか…お前らにいいところさせようと頑張って苦戦したのに…合格みてえだわ、わりいな」

「だったら安心しろ、俺はBだ」

「僕はCだから安心して」

「私はBだよ」

「らっ…ランクは関係ねえよ！」

「「クスクス…」」

「お前ら…？」

「まあまあ、それより夏の合宿楽しみだね僕ら全員合格みたいだし」

「そうだな…」（スパー）

「そだね」

「まあ、そうだな（笑）」

結果俺は合格になり

俺達全員、夏の合宿へ行ける事になった

三巻に続くよ

by 北世 夜水

ウタ×カタ（二巻）（後書き）

すっませんでしたー！！>（――）<
一巻で誤字があつたみたいです
編集見落としてホントすみません
今回のもあるかもしれせん（泣
こんな私ですが
これから読んでくれる方は
よろしく願います

ウタ×カタ (三巻)

ウタ×カタ (三巻)

周弥の日記【疲れた一日】

【昨日、実力見定め授業つてのがあった

1 ミッション目は白・黒呪、魔法、妖術などの精密度を測る試験だった。

2 ミッション目は

医療道具を使つての応急処置。

3 ミッション目は

プログラム化した董の攻撃を受けた

プログラム化した重傷者を

10分間でどれだけ回復させられるか。

まあ、結果1M成功、2M成功、3M成功だった…。

そんでそのあとは灰崎を回復させて…

「たく疲れる一日だったぜ…」

- - - - -

第九章【意外な真実】

俺は結局、試験に合格し

合宿に行けるようになった

行けるようになったのは嬉しいが

「今回の夏の合宿は旅館一つ貸し切りですがマナーを守り生活してください。」

『はい』

こんなの放課後に集めて言うことかあ？

「ーかみんなもよく返事するな…」

俺だけ、ほお杖をつきながら

ボウツとしていた

「それでは、明日から夏休みになりますが、忘れず7月28日に来て下さい。…では、解散」そう先生が言うと

各々が帰る準備をし始めた

もちろん俺達は、はなっからしていた

「さあて、帰つか？」

「そうだな」

「うん」

二人の了解の合図を聞き

帰ろうとしたら

「私も一緒に帰る！」

と夜水が言ってきた

「でも、お前ん家と俺ん家一緒の方角なのか？いくらなんでも違ったら帰れねえぞ？」

「私の家は、十花郎君家のすぐ近くだよ？」

…はい？

「ちょっと待て！場所なんか教えてもねえのにどうやって知った？しかも中学校違うのになんで近所？」

「えっと、夜買い物から帰って家の前についたら少し離れたところにある家に十花郎君が入っていくの見たから、あと家が近所なのは高校になって引越してきた」

「そうだったんだ…」

結果その日は夜水もいれて帰る事になり

合宿日当日は四人で登校することになった

- - - - -

第十章【秘密の姫】

- ジリリリ ジリリリ -

俺は騒音で目覚めた瞬間

「よし！夏の合宿…行くぜ！」

寝間着を着替え

合宿の用意を持って

ライダーを適当に搔っ攫い

バイクのキーを持って家を出た

そして俺は

約束した場所（周弥ん家）に行く前に…

夜水の家へ向かった

そこで俺は驚いた

「まさかの三階建て！？」

昨日で家がどこかはわかったが

場所確認っただけで

家自体は全然見てなかったし

寄り道して帰ったから

19：00はまわっていて暗かった

しばらく圧巻しインターホンを押した

・ピンポーン・

「あっ、十花郎君！ちよつと待ってて♪」

「わーった」

そう言われて玄関で待つこと数分

・ガチャ・

「ごめんね、待たせちゃって↑」

やっと出てきたか…

俺はアプリをやめて

「んじゃ、行くか」

そう言っつてバイクのヘルメを渡そうと

夜水の方へ向いた…そう向いた

「……………」

「ん？どしたの？私に何かついてる？」

「えッ？い…いやなんでもねえ」
「？そうなの？」

相手は夜水のはずなのに
なんつーか…可愛いと思っちゃった
けどそんなこと悟られたら恥ずいから
俺は話を反らした

「それより、これ被れ」

「でも私、運転出来ないよ？」

「バカ！後ろ乗せてやる」

「なるほど」

「おら、さっさと後ろ乗れ」

「えへへ」うん」

なんかスゲー嬉しそうに
後ろへ乗ったと思ったら

…だきつ…

「ばっ！！なに抱き着いてきてんだ！」

「えっ？こうしないと落ちちゃうよ？」

確かにそうだ

だが俺は反射的に、言ってしまった
しかしごまかす話題が思い浮かばず

「うつせーよ！」

ただそう一言言ってバイクを走らせた

- - - - -

第十一章【集いし合格者】

無事周弥の家にたどり着き
学校に着いた

そして言われた番号のバスに乗った

「すげえな…この特注バス」

「まあ、ここ（桜流宮学園）専用の特注バスだからな」
「広いね。」

「一人一人に机もあるよ！」
各々が感想を述べながら
空いている席に座った

空席の数からして俺達が最後だった
「へえ、君も合格したんだ」

すると、誰かが俺に話し掛けてきた

こいつは確か実力見定め授業のときの

「お前、要だったよな？名前」

「フフツ、そうだよ。よく覚えてたね」

「バカにすんなよ？結構俺、頭いいぜ？」

「フフツ、そういう意味じゃないよ」

「意味分かんね……」

からかったり、談笑したり、そんな感じで
皆自然と打ち解けていった

――

そしてバスに揺られること二時間

「やつと着いたぜ……！」

「そうだな」

「たのしみ……」

「楽しいもんでもないでしょ？」

「え……？きつと楽しいよ」

やつぱ、夜水は馴染みやすいやつなんだな……「夜水ちゃん……かわいい
いです……（ボソツ）」

やつ……やつぱあれは女でも
可愛いと思うみてえだな……

そう思いながら夜水を見ていると
周弥が話し掛けてきた

「おい、なに突っ立てやがる」

「えッ！？いついやなんでもねえ！」

夜水に見とれてました。

なんて言えるわけがねえ

「へえ…それにしても顔が赤いぞ？」

「うるせーよ！顔が赤けえのは関係ねえよ！」

「なんでもねえのに、関係、無関係があんのかよ？…まあいいか、それより早く風呂入って今日は寝ようぜ」

「ああ」

ふう…危ねえ危ねえ

ちなみに今日は特に何もなく

22：00までに風呂に入り

後は好きにしてよいとのことだった

が、皆早朝に集まり

バスの中ではしゃいだから

着いたときにはバテバテだった

もちろん俺も疲れていた

この日は夜更かしとかはしねえで

即行風呂に入り眠りについた

- - - - -

第十二章一節【学泊一日目（朝）】

「おい…起きろ」

「…」

「灰崎、起きやがれ！」

「…」

「…っ？」

「ドカツ！」

「…痛つてえ！！？」

「さっさと起きやがれ」

「もう少し、優しく起こしてあげなよ」

「マジそれだぜ」

「うるせー、優しくしても起きなかったから、こうしたんだよ」

「アハハ…そうえばそうだったね（苦）」

「……………」

「……………」（ジュツ）

「熱つつあー？何しやがる！！」

「生意気言った罰だ」（スパー）

「うつ…わりい」

「あつ！このままじゃあ朝食時間に遅れちゃうんじゃない？」

「おっと、そうだな…」

「遅れたら十花郎君は、無駄に痛い思いをしたことになってしまふよ」

「そうだな…灰崎行くぞ」

「ちよつ！まだ着替えてねえ…！」

「ああ？…早くしろ」（スパー）

周弥の言葉に従ったわけじゃねえが

急いで着替え

俺達は急いで朝食場に行った

そして食堂に着き

俺が辺りを見回して

思ったことを言ってみた

「それにしてもよ？やっぱこう見ると、ここにいる奴ら数人強そう

に見えねえ奴がいるな」「ああ…お前とかな」

「んだと…！」

俺は握っていたフォークを

周弥にぶつ刺すため、振りつけたが

「冗談だよ」

と、返答が返ってきた

まあ、小学からの付き合いで

俺の実力を雑魚と称する奴はいねえよな

「けど、そう思ってる奴はいるかもしれないな」

「ハッ！そいつは面白れえ」

「そうか？」

「ああ」

それから数十分経ち

朝飯の時間が終わり

帰ろうとしたんだが…

>ギョルギョル…！<

「わりい…先、帰っててくれ…トイレ行ってくるわ」

「わかった」（ジュボ……スパー）

「いつてらっしゃい」

そして俺は急いでトイレに向かった

- ガチャ、ジヨゴゴゴ -

「まったく、ひでえ目に遭ったぜ…」

食事をした後なのに

俺の顔はゲッソリしていた

久しぶりに健康的な朝食を摂ったからか？

だったら出さずに吸収しろってんだ！

そんな一人会話を頭でしながら

トイレを出ようとしたら

- トンツ！ -

何かがぶつかってきた

「痛ってえな…あん！？…お、女？」

なんと男子便の

前でぶつかってきたのは女子だった

「えッ！？男？」

「いや、えッ！？って言いてえのはこっち…」

「このヘンタイ！！」

「ドカツ」

「Why！？（何故！？）」

わけのわからない攻撃に

驚いた俺は苦手な教科の英語で

今の感情を喋っていた

「何故って…女子便から男子が出て来るなんて、ヘンタイの何物でもないわよ！」

「ああ！？ちゃんと標識見やがれ！」

「見たわよ！だからこっちに入ろうと…」

「これのどこが女子便マークに見えんだよ！」俺は標識をバンバンと叩いた

「どこからどうみても男子便じゃないのよ！…えッ！？男子便！？」

ようやく自分の間違えに

気づいたみてえだな

「……………」

「…わかったか？お前が間違っ…」

「ご、ごめんなさい！！」

「ダッ」

「って、おい！」

俺は変態扱いを免れるために

途中は必死になっていたが

別に怒る気はなかった

けど、女は急いで女子便に向かって行った

まあ、恥ずかしくて逃げたんだろうな

俺だって逃げ出してるだろうな…

……………

第十二章二節【合宿一日目（昼）】

「ふああ…ハア、めんどくせ」

「だめだよ？そんなこと言っちゃ」

「めんでえもんは、めんでえんだよ…」

今は皆で集まって

普通の五教科の勉強中

なんで戦闘学が専門の俺達が、ここまで来てこんなことをしなくちやなんねえんだよ…

安部コーと先輩共めえ！

「にしても、夜水はよく飽きねえな」

「お勉強は楽しーよ？」

「そうか？」

俺がペンを放り投げ夜水と話していると
千裕から注意をつけた

「そこ、私語は慎め」

「はい」

「へいへい…」

ペンを握り「ハア」とため息をついた
すると周弥が小声で話し掛けてきた

「おい…！」

「ああ？」

「そつ気を悪くするな」

「だってダリイだよ？」

「けど、これが終わった後は自由に等しいぞ」「マジか！？」

「ああ」

「どんな、内容なんだ？」

「ほらよ」（スパー）

なにに、旅館内のみ自由 か…

「めちやくちや楽じゃん！」

「だろ？それが 不真面目だったから無し …なんてことになった
ら萎えるだろ？」

「確かに…」

「分かったら我慢しろ」

「…わーった」

俺は周弥の言葉で渋々勉強を始めた

- - -

「よし、勉強時間は終わりだ。解答用紙はその場に残しててくれ」

俺は勉強という拷問に40分耐えた

頭の中は、疲れたその言葉しか出て来ない

「ハア…やつと終わったぜ」

そう言いながら、伸びをしていると

隣で勉強していた夜水が

「でも結構問題、解けてるじゃん？」

と疑問を持った顔で言ってきた

「そうゆう意味じゃねえんだよ」

俺は腰を上げながらそう返答した

「じゃあどいう意味なの？」

「解けても解けなくても、ダルいもんはダルいんだよ」

「えー？勉強なんてクイズと一緒にだよ」

「あゝはいはい…もう勉強の話しは終了！」

俺は勉強の話を打ち切るために

無理矢理話を流した

するとクスクスツと夜水が笑いながら

なでなでと俺の頭を撫でてきた

「なっ…！なな、何しやる！」

「さっきの十花郎君、思春期の子供みたいで弟が一瞬出来たみたい

」

こいつ？

「ヒュウヒュウ！熱いねえ…」（スパー）

「もう仲良いの認めたらいいのに」

「お前ら…くたばりやがれ！パーソニフィ（具現）！」「……」（スパー）

「あっ…？」

古代数式文字の様なものが出てきて
徐々に俺の武器が現れ始めた

- ジャキ -

完全に姿を現した剣を横へ薙ぎ払った…

「おるあああ！！」

- ガキン！！ -

つもりだったただけで

実際は宙を舞ながら

後ろへ跳んで行っていた

「なに！？」

「フツ…」（スパー）

「アハハ…」

「…??」

こいつらの技か？

いや、それだったら

なんらかの動作はあるはずだ

だとしたらなんだ？

頭の中で考えていると

後ろから声が聞こえてきた

「武器なんか出して何をしている？」

この女は確か、前でずっと座ってた先輩？

近くで見ると

すげえ威厳のある人に見えるな

「あっ…えつと…これは」

良いごまかし方が見つからず

言いよどんでいたら

「しかも男女二人で」

と言った。

完璧、周弥と圭介を無視していたので

「いや、もう二人いますよ??」

すると首を軽く傾け

「…悪いが、見当たらんぞ?」

「……あり?」

あいつら逃げやがったな……??

…いや今はそれよりも、言い訳考えねえと

「えーつと…その…」

あつ…良い言い訳あるじゃねえか

「武器の見せ合いしようぜってなって…」

「そうか、ならよいが…次からやる場所は考えろ」

「わりっ……すみません」

「うむ、わかればいい」

そう言った後「では」と言って去っていった

「…じゃあな夜水」

「え? うん♪ ばいばい」

危ねえええ!

マジやべかったぜ…

…その後部屋に戻ったが

周弥も圭介もいなかったので

テレビを観ていたが

俺はいつの間にか眠っていた

- - - - -

第十二章終節【合宿一日目（夜）】

「…ん…ふわぁあゝあ…」

「よう、お目覚めか?」

「んあ?」

「寝ぼけてんな」(ジュー！)

「熱っ！」

俺はいきなりの熱さに驚いて目が覚めた

「目え覚めたか？」(…スパー)

「おかげさまでな？…つーか今何時？」

ふと気になり聞いてみると

圭介が答えてくれた

「もう21:00だよ」

ふーん9時か…

「えッ！？もう9時！？」

「まさかお前が自由時間、全部睡眠にするとはな…驚きだぜ」

「仕方ないって…十花郎君は疲れてたんだって」

…俺はこの日より自分を恨んだ日はない… そんな言葉が俺の中に
浮かんた…

四巻に続くってよ…(スパー) by 蒼木 周弥

ウタ×カタ（四巻）（前書き）

どうも、フライデー・ピンクです。

ここまで読んでくれる方は

お気に入り登録してくれたら光栄です。

出来たら本文読んで下さい

ウタ×カタ（四巻）

圭介の日記【面白い合宿】

【夏の合宿…はつきり言ったら

合宿最後日の三日前までの日は

自由と一緒に感覚で過ごせる内容ばかりで凄く楽しい（＾－＾）

特に十花郎君がモテることがわかったし

それに僕も新しい友達ができて

残り四日で帰るけど

楽しい思い出が出来た（＾－＾）】

- - - - -

第十三章【合宿五日目】

「今日と明日がこの合宿のメインの準備などをする大事な日だ、まあいつ作戦を考えてくれても構わんが寝るとき以外はどの部屋に入ってくれてもいい、グループ分けはさっき言った通りだ。戦闘会場には、さっき配った物を使って来い。以上解散」

「……クツクツク」

ついに来た…

「ついに戦える日が来たぜ！」

この合宿のメインイベントは

合格者を複数のグループに分け

そのグループで戦うってのらしい

楽しみで疼いていると

その様子を見た周弥が言ってきた

「なに一人でモゾモゾ、ニヤニヤしてんだ？」「ちげーよ！疼いてんだよ！」

そう弁解するが

周弥は軽く受け流し

「まあ、勝手に疼いてくれて結構だが作戦会議するから来い」

「会議い…なんかめんどくさそ」

そう俺が率直の意見を言うつと

「ゴチャゴチャ言ってるな」（ジユッ）

お馴染みとなってきた

いじめのようなお仕置きのような

罰をくらった

「熱っ…わかった行きやいんだろ？」

「ああ、早くしねえと女共がうるせーしな」

- - -

「ワリイ遅れちまって」（スパー）

「別にいいよ」

「十花郎君は？」

「ここにいるけど…？」

「ホントだ」

つたくちゃんと探して言えよな…

夜水に半分呆れていると

アイツ が言ってきた

「ふんっ！チームリーダーと副リーダーが遅れるなんてありえないわよ！」

「うるせー覗き未遂！」

こいつの本名は 赤羽 瑠璃

あの時便所の前でぶつかってきた張本人

「あれは不慮よ！それにまだ覚えてたなんて、どこまで根に持っているのよ！」

「別に根に持ってねえよ」

「じゃあ名前で呼びなさいよ」

「わかったわかった」

そんなやり取りを瑠璃としていたら

周弥が見飽きたかのように

口を開いた

「おい、お前ら会議始めるから静かにしろ」

「……………（黙って睨み合い）」

「……………お前らのせいで明後日負ける」

「……………」

負けず嫌いな俺と瑠璃は

周弥の言葉で一気に黙った

そして会議ができる空気になり

周弥が次は真面目な顔で口を開いた

「よしそれじゃ作戦会議始めるぞ、これからは私語は慎め…何か言いたいなら手を挙げる、当然、作戦に関係ないこと言ったら承知しねえからな」

周弥がそう言うのと皆頷いていたが

俺は頷かず一つ聞いた

「なんで周弥が仕切ってたんだ？」

「……………（ジュツ）」

「熱ち…！」

「手エ挙げるつつたろ まあいいが…理由は俺がリーダーだからだ」

「……………（ガーン）」

俺がショックを受けていると

ところがどっこい、と言う感じで

周弥が言ってきた

「けど、副リーダーさんには頑張ってもらっからな」（スパー）

副リーダーってことは

リーダーの命令で

同じグループの奴らを先導出来る立場か

「なら…異論はねえ」

「で、作戦内容に入るが…。」

それから皆自然と静まり
会議に集中していた

- - - -

「- - :とまあ、こんなもんだな。以上、解散」

4時間に渡る会議をして

周弥は皆に解散命令を出した

会議自体には疲れなかったが

実は周弥に

リーダーの素質があつてショックだった

けど素質なかったら

リーダー務まらずで困ってたんだが

：まあ相手がどうくるかだな

- - - - -

第十四章【始まりし戦い】

いよいよグループ決戦当日

皆が緊張しているなか

周弥が口を開いた

「準備はいいか？」

「ああ」

「うん」

「うん」

「いいわよ」

「よしっ、行くぞ」

「- - 「オー!!」- - 」

皆のモチベーションを高めるため

鼓舞した後

戦闘会場に行くために

渡された道具を周弥が発動させる

「モーメント・ラーデイズ（瞬間転送）！！」

・シューイン・

転送された場所は

森のようなところで

大きめの木造の家があった

「なるほど…ここが俺らの拠点ってことか」（スパー）

「なんでそんなこと分かった？」

ただのフィールドの飾りかもしれねえ

この木造の家を、何を根拠に

拠点と言ってるのか俺には分かんねかった

すると周弥が

小ばかにした風に笑いながら言ってきた

「『茜荘』グループA様』って書いてあるからわかるんだが？」

（スパー）

「……………」

「…もしかして見えてなかったのかい？」

「えへへ♪十花郎君かわいいねえ♪」

「見てて呆れるわね…」

「うるせえ！！早く作戦に移っぞ！」

「…まあ福リーダーさんの言うことに賛同だな、全員作戦につ……………」

その瞬間、周弥の目の前に

何かが出現した

・ビュンツ・

「！？おつと」

「おい、今かわしすとこじゃなくね？…ククッ」

「はッ…無茶言ってるじゃねえよ」

「敵…かよ…！？」

いくらなんでも早過ぎだろ

だって配置は結構離れてるってのに

「なんでこんなにも早く敵が？って思ってたんじゃない？お前ら…ククッ！じゃあ教えてやるよ、どこに戦いのルールで待ち伏せなしって書いてあったよ？」

そう言いながら敵は構えをとり

「パーソニティ（具現）」と言って武器を出した

「ククッ」

こいつトンファが得物か

「（ニヤッ）：パーソニティ（具現）」

「？」

俺は武器を横にはらった

「ガキイェン！」

「何？お前」

「こいつ…！！」

オレの渾身の一撃を

何これ？攻撃してんの？

みたいな感じで防いでやがる！

「舐めやがって！」

「ククッ」

そこに隙について

周弥が横から攻撃をした

「しゅっ」

「おっつと、危ねえじゃん？ククッ」

やつを俺から離し

隣に来て呟いた

「灰崎…」

「…ハッ！了解い！」

「…ククッ」今更何やっても無駄じゃね？」

そう言いながら俺のほうへ走ってきた

「今だ！夜水！！」

「うん！白呪第十二条『人消炎』」

「ボッボッ」

「！？」

よし、皆行つたし

相手も怯んだ

「うらあああ！！」

「やばっ！？」

「ガキン！！」

「なっ！？」

「いらねえことしてんじゃねえよ……」

「…今の攻撃、私が防いでいなかったらどうなっていたか櫻…お前ならわかつているはずだ」

もう一人来やがったあ！！

「こりあ…やべえかもな…」

+

「十花郎君…大丈夫かな？」

「心配すんな圭介、やつはあんなもんで負けやしねえよ」

「ホントよ！十花郎はバカだけど強いから負けないわよ」

「ほう…これは意外だ、瑠璃の口から灰崎に対して強いという褒め言葉が出るなんてな」「べっ、別に褒めてないわよ！！」

「実は瑠璃っち十花郎君のこと好きなの？」

「す、すす好きなわけじゃない！！」

「フツ…さて、そろそろ実行するか」（スパー）

+

「はあ…はあ…どうしたよ？そんな…もんか…てめえら…はあ」

「こいつ…タフすぎじゃ…ね？」

俺は二対一にも関わらず

五分五分の戦いをしていた

「…大丈夫か？櫻」

「はあ…ちよつと…ヤバ気」

「ここは退くぞ…」

「ハッ！…逃がさねえよ！！」

そう言つて俺は

相手の目の前に一気に移動した

- ヒュン！ -

「！？」

そして勢いよく巨断剣をたたき付けた

「もらったああー！！」

- ドガアアン -

「はあ…はあ…」

なんとか倒した。

そう思つた時

後ろからしないはずの聲がした

「遅いな…」

「なっ！？」

「白呪第二条『禁』…」

「ぐお！？」

身動きが取れねえ…

終わつちまつたか

「白呪第四十条『天歩』…」

この状況で白呪だと

俺を殺すチャンスじゃねえか

「…なんで逃げんだよ！」

「言つたはずだ、今は退くと」

「ククッ！…じゃあな」

- ビュオン -

「…チッ」

胸糞わりいが

俺は周弥達と合流するために

急いで合流地点にむかった

第十五章【合流】

・カアン…ガキイン・

「…予想外だな」（スパー）

「うん…」

「どうすんのよ…」

「…すごい戦いだね」

「…灰崎と合流してから考えるぞ」

「それにしてもすでに他のところと戦ってるなんてね」

・ヒュン！・

「…「！？」」「」」

・バギイイン・

「…「???」「」」

「灰崎 十花郎…ただいま見参!!」

「…「」」……「」」

「…つてあれ？周弥達いねえ？」

「あの馬鹿」

「やっちゃったね…」

「ほんつと馬鹿ね」

「十花郎君かつこいい」

「…しゃーね、出るか」

「…「了解」「」」

・ブシャアア・

「ごめんなあ…みんな…やられて…もった」

さっきの櫻と梅俊つて奴らのおかげで

だいぶ戦いに慣れてきたのか

鷹嶋 麗袴つてやつは楽に倒せた

「ハッ！全然楽勝だぜ！」

「あつ！！麗袴さん！」

「あ？」

いきなり横から叫び声が

聞こえたと思つたら

次は殺気のこもった言葉が聞こえた

「許しません…許しません??」

・ビュビュビュビュ・

勢いよく放たれるアーチエリーの矢を

俺は軽々とかわした

「よつと！」

けどかわしたのと同時に

放たれた矢に気づけなかった

「やべっ！」

・ダダダダッ！・

ガトリング音？

「まったく、だらし無いわね…十花郎ったら」「瑠璃!？」

「おら、さつさと武器構えろ」(スパー)

「十花郎君、おかえり」

「周弥に圭介！」

「さすがの十花郎君でもこの人数はきつい?」「夜水！」

「ハッ!…んじゃやつちまうか」

ようやく本番のような

シチュエーションだな

もちろん勝つのは…俺達だ!

五巻に続くんだってさ by 宮乃 圭介

――――《ただ今の生き残り》

(×) 印しは敗北者を表す

Aサイド

蒼木 周弥

灰崎 十花郎

宮乃 圭介

北世 夜水

赤羽 瑠璃

Bサイド

世戸峰 クリス&メイフィン

阿久津 要

鷹嶋 麗夸(×)

西宮 梨里

黒瀬 泉

Cサイド

阿川 柳真

九澄 由

九澄 遊

天根 愛

委 椿垂

Dサイド

マリー・エリザベスト

ナタリア・ファミネリア

シアン・ヴェロツカ

辻 櫻

田上 梅俊

- - - - -

ウタ×カタ（四巻）（後書き）

すごい後のことになるんですが
七巻から後書きにおまけコーナーを
配置します。

ウタ×カタ（五巻）（前書き）

やーやー皆さん！！

ウタ×カタの中ではもう夏休みが…

夏休みが終わりそうですよ…！！

新たにR指定をつけました

深い意味はないです… f ^ _ ^ ;

今回である程度のキヤラは

分かると思います！！

では読んでって下さい

ウタ×カタ（五巻）

瑠璃の提出作文【夏の合宿のこと】

【楽しかった。（´Д、`）】

絵文字的に楽しそうではないのですが
本当に瑠璃さんは楽しかったのですか？

要の提出作文【合宿で分かったこと】

【どこに行っても美しい僕…】

夏の風に揺れる一輪の花と美しい僕…
なによりも美しすぎる…僕】

要君は放課後職員室に来て下さい。

- - - - -

第十七章【分担】

『ゼエハア…ゼエ…ハア』

もう皆バテて

ほとんどの奴らが息切れをしている

「ハアハア…ツクソ！」

全然蹴りのつかねえ戦いに

イライラしていると

隣で戦っていた周弥が言ってきた

「これじゃあラチがあかねえ…分担するぞ」

そうか！その手があったか

それなら戦いやしーし

「んじゃ早速行動に移るか？」

「そうだな…（ゴソッ）」

そう言う周弥は何かを取り出した

「コイン…シューターとカード？」

「まあそんなところだ」

周弥はそれぞれ色の違う

コインシューターとカードを取り出して

俺には青

夜水にはカード

瑠璃には黄

圭介には白を渡して

周弥自身は緑を持っていた

「これを戦いたい奴または戦いやすい奴にむかって撃て…弾数はそれぞれ五発だ。慎重に狙えよ？」

「私はカードだけど、どうすんの？」

「ああ、何もなくていい」

「わかった」

「ま、上手に使えよ？」

「…了解！」「…」

皆了解の合図はしたが

俺達四人は試行錯誤していた

「どんな効果のものなのかな？」

「しらねえよ」

「なんでこんなもの持ってたのかしら」

「こういう時のためなんじゃねえの？」

「でもこんなもの使う作戦なんて会議の時、出て来なかったけど」

「…確かに」

すると瑠璃がシューターを構えながら

「やってみないとわからないでしょ」

と言ってアーチェリー使いの女目掛けて

コインシューターの引き金を引いた

・バシユン・（引き金を引いた音）

・シュイン・（瑠璃と標的が消えた音）

そういう事か

このコインシューター自体が
分担器だったのか

確かにこれだと分担しやしいな

にしても、だったらこれ最初っから
渡してくればよかったのに

「何がおこったんじゃ！？」

「梨里が消えましたわ！」

「次から次へと醜いね……」

瑠璃のおかげで皆動揺してるな
やるなら今か……

・バシュシュシュ！・

どうやら周弥達もそう思ったらしく

同時に三人のコインは

それぞれの標的に飛んでいく

「……！？」

・シュイン・

――――――

第十八章一節【同時刻の分映（周弥）】

「お前、何したアルか？」

俺が狙った標的がそう質問してきた

が俺は詳しくは教えず

「ん？ちよつと細工をな」（…ジュボツ）

とだけ答えた

「まあいいネ、ちようど人が多くて戦いにくかったところアル」

「そうかい」（スパ―）

俺にも有利何だが……

「…何アルか？その態度…もうすぐ戦いつていうのにタバコなんか吸つて。もしかして、あたしの事嘗めてるアルか？」

「すげえしかめつつらだな…」

「ここは挑発のチャンスか」

「ほう…意外な質問だな。じゃあ聞くが、何故今俺とお前だけの状態になつてゐる？」

「そんなのお前が変なの飛ばしたからネ」

「正解。じゃあなんでこんなことをしたのでしょうか？」

「人が多くて邪魔だったからアルか？」

「ぶつぶ…不正解。」

「じゃあなんでアルか？」

「正解は、お前と一対一なら勝てると確信してるからだ。…つまり、お前は俺に狙われた時点で俺に舐められてたつてことだ」

「……ろすアル」

「？」（スパー）

「ぶつ殺すアルうう！？」

「シュバ」

殺気の込められた拳がとんでくる
俺はそれを綺麗にかわしてやった

「おっと…」

挑発成功！

…この勝負、俺の勝ちだな

そう確信して一時間

「シュシュシュシュシュ」

「どうした？一発も当たってねえぞ？」

「うるさいネ？こうやってずっと攻撃しとけばお前らのパーソニティ（具現）はできないアルねざまあみるアル」

こいつ、俺達全員

パーソニティ（具現）が

主な攻撃手段だと思ってるのか

「……………（ニヤツ）」

「何笑ってるアルか！この…」

「いい加減黙れよ」

「パンパン…パン」

「！？」

「ビュンツ…」

俺の標的（委　椿垂>イ　チェンスウ<）は

勢いよく吹っ飛んで

近くの壁にぶち当たった

「何…した…アルか？今…」

「俺は具現武器を持てねえ変わった体質でな…そのかわり…」

「そのかわり…？」

「指圧魔法はお手の物だ」（スパー）

「刺圧磨宝…アルか？」

「それにお前、頭に血が上がりすぎて嵐花拳法使って来なかったしな

…」

「悪い癖アル」

「つーことで、お前の負けだ…じゃあな」

「カチッ」

「お前だけは…こしてやる…アル」

「キューイン」

そんな捨て台詞を残し

自拠点に転送される椿垂を見届け

俺は座り込んだ

俺は勝ったが奴らはどうか…

第十八章二節【同時刻の分映（十花郎）】

「やあ、灰崎君…久しぶり」

「そうだな、要」

「君もなかなか強いみたいだね」

「あたりめえだ」

「でも可哀相だなあ…」

「なにがだよ？」

「僕を標的なんかにするほど…力の差がわかんない頭してるんだからさ」

「よく言うぜ!!」

誰が俺にとって戦いやすい奴なのか

全然わかんねかったから

戦いたい奴にしてやった

「仕方ない、せめて美しく散らせてあげよう」「ハッ！やってみやがれ！」

「「パーソニティ（具現）」！」

「ふふっ…いくよ？」

タクト！？

てことはコイツ…

「アイ・ツエラッコ・ルル」

- ゴゴゴゴゴ -

要が意味不明な語源を発すると

複数の氷玉が出てきた…

やっぱりコイツは…

「おらああああ！」

- バリリリン -

「なっ!?!」

「…（ニヤッ）」

俺の得意分野!!

「…要…」

そこで俺は少し笑った後

「お前は30分で倒せる！」

「……ふうん、言うじゃないか…でも、それは無理だろうけどね」

- - - - -

第十八章三節【同時刻の分映（瑠璃）】

ウチの狙った 西宮 梨里 は

不安げな顔でウチに聞いてきた

「あの…瑠璃姉さま、これはいつたい？」

「残念だけどウチも知らないわ。作戦会議でこんな作戦教えられてなかったからね」

ホントにわからないから

事実を言うところにあることに食いついてきた

「教えられてない？」

「？そうよ」

梨里の性格はこの合宿で

ある程度わかったので

ウチはすごく嫌な予感がした

「では、告白で…」

「そんなわけじゃない！！」

「じゃあ何故ですか！？」

作戦会議にでてないと言ったけど

周弥は当たり前 コレを

取り出してたから…

「きっと、周弥の裏作戦ね」

「あのタバコの？」

「ええ」

すると梨里はしばらく黙り込み

何かわかったのか目を見開いて言ってきた

「まさか、麗袴さんのこと好きなんですか？」

「なっ、なんでそうなのよ！？」

どう考えたらそうなるのか
ウチはすごく疑問になった

「……………はあ」

ウチは小さなため息をつき
早急に終わらしたいと思い
冷静に銃を構える

「…いくわよ、梨里！」

「瑠璃ちゃん…」

・バンッ・（弾の発射音）

・ボガーン・（弾の爆発音）

「（避けた形跡はない…もしかして倒せた？）」「そう思ってしまい
少し安心感がでた瞬間

・グサッ・

「痛った！」

「私…女の人相手なら、手加減出来ませんよ？瑠璃ちゃん」
（ゾクッ！）

な、何？今の…すごい殺気
ウチは少し怖くなったけど
そんなこと悟られたら恥ずかしいので
無理矢理笑いながら口を開いた

「ハハ…言っじゃない梨里！」

そう言つて右側に走ろうとしたら
（ズキンッ）

「くっ！？」

「あらあら、ちゃんと傷の位置を確かめながら、動かないとお、瑠
璃ちゃん」

光矢でウチの左足はやられていた

・ドストスッ・

「ぐっ！」

次は右足と右手を

「うふふ」瑠璃ちゃんの苦しがる姿、とっても可愛いですね」

そう言つて舌なめずりをする梨里

そんな梨里にウチは問い掛けた

「梨里…ウチをなぶり殺すつもり？」

「ええ…だつて私はいろんな女性の、色々な表情を見たいんです。私、女性のこと大好きですから」

「……………」

梨里は…

梨里は…い、イカレ百合だ！

合宿当日の風呂のときから

超ド級の百合なのはわかったけど

ここまでくれば

イカれてるとしか言いようがない

ウチは言葉をなくし

慌てて三発、弾を発射したけど

それは簡単にかわされてしまった

そしてウチは梨里の矢を見て絶望した

「ギューン」

「（何よ…あの馬鹿でかい矢は）」

明らかにウチの身長よりもでかい矢が
弓に添えられていた

「これで決まりです…瑠璃ちゃん」

そう言つて梨里は矢を放った

「ドンッ！！」

するとウチは数？浮き

後ろにあつた樹に抑え付けられた

「ぐはあ！」

たたき付けられた衝撃と

矢の威力で激痛が全身に走った

でもウチは激痛を我慢し動こうとしたけど

ウチを貫通して後ろの樹にも

矢が刺さったみたいでびくともしない

「はぁはぁ…ゴフツ」

「うふっ！うふふ♪普通の瑠璃ちゃんも可愛いけど、こんなときの瑠璃ちゃんも最高に可愛いですね」

「どこが…かわ…いいの…よ」

ウチは恐怖や痛み

色々な事が混ざって涙が出てきた

すると梨里はいやらしい目をして

よってきた

「あらあら、涙が出てますよ？瑠璃ちゃん♪」そう言つと梨里はウチの顔に自分の顔を近づけて

舌で涙を拭い始めた

「ひっ…ああ…！？」

-ペロツ-

「んっ…なに…してっ…んのよ…」

「あら？瑠璃ちゃん、もしかして感じてるんですか？」

正常な女の子なら当然の反応よ…

けど梨里の前でそんなこと言えない

「別に…感じて…ないわよ」

「うふふ♪可愛いですね♪、瑠璃ちゃんったら」

そう言つて顔を離す梨里

「（まさか…ウチが百合行為にあうなんて！）」そんなことを思っている

「さて、涙も拭ったことですし…終わりにしましょうか♪」

笑いながら留めの言葉を言い放ち

弓矢を引く

「（お願い…誰か…助けて…）」

-ギュギュン！-

そう思っている間にも

梨里の矢は大きくなっていく

「（もう少し…この武器…上手く使えてたらなあ…）」

・ギユイン・

お願い、力を…

・ギンツ・

お願い…お願い…お願い

するとひとつ方法を思い出した

「（そうだ…ひとつだけ…あるじゃない）」

さつきからあまりにも圧倒的すぎて

頭が真っ白になってたけど

ウチの技でひとつだけ方法がある

でもその方法はウチもくらうだろう

けど今は迷ってる暇はない

「梨里…残念だけど…アンタはウチに勝てないわ…」

「今更、そんな口を叩くんですか？」

「見てなさい…トランスフォーメーション！」

・パアアン…キュイン・

ウチの銃は姿を変えて

だんだんと変わっていく

「銃の形が…バズーカに!？」

この近距離なら相打ちまで持ち込めるはず

「さようなら…梨里」

「っ!？」

・ドンツ・（瑠璃のバズーカ音）

・バスンツ・（梨里の射撃音）

・ドガン！・（相殺音）

「…瑠璃ちゃん…ずるい…ですよ…こんな技を…持つてる…なんて」

「隠す…つもりは、なかつ…たわよ…」

「逆…転させられ…ましたね。…瑠璃ちゃん…あなたの…勝ちです。」

「そう言つてにこやかに

転送されて行つた

「なにが…逆転よ…」

確かにウチは

あのままだと梨里が無傷で負けていた

けど、今のウチを見ても

決して勝つたとは言えなかつた

両足の負傷

右腕の負傷

左腕はなく

高等部からの出血

腹部の貫通した傷

どちらかと言えば相打ちに近い

「…つたく…冗談じゃないわよ…」

体力の限界で

その場に倒れ込むと

歌が聴こえた

『♪あなたは怖がるけれど、私は嬉しい…それは何？それはあなたの死♪♪』

「なに…この声…」

・ビュイイイン・

真上からなにが飛んでくる

あれは…チエーソー？

「（…ホント…冗談じゃない…）」

・ビュイイイン・

「瑠璃ちゃん！」

「えっ…？」

- - - - -

第十八章四節【同時刻の分映（夜水）】

- ガキイイソ -

「大丈夫？… って大丈夫じゃなさそうだね…」 わたしはなぜか意味不明な所に転送されて

そしてなぜか樹に矢印が描かれてたからそれに沿って行っている

瑠璃ちゃんがピンチだったから

急いで助けたけど…

「間に合ってよかった」

「夜… 水？」

- すたっ -

「おい、おまえ…」

「「えっ？愛！？」^{おまへ}」

チエーソーが武器だから

てつきり男の子が相手かと思ったけど

身長が142cmという

可愛らしい外見の愛ちゃんなんて

わたしは驚きながらも

愛ちゃんに笑顔で語りかけた

「なあに？愛ちゃん」

「夜水のせいでやりそこねたぞ…」

「そっかぁ、残念だったね」

「謝れ」

「うん、それはできないよ」

「謝れ」

「できないってば」

「殺れ」

「もっと、駄目だよ」

「……？」

あれ？怒っちゃった？

- ビュイイーン -

「殺してやる……」

あらら、これはやるしかないかな？

「んじゃ《禁》♪」

- バシユツ -

「うあ！？」

「黒呪第二十三条《偃月刀》♪」

- ジャギン -

わたしの黒呪を見て「やめてくれ」と
言ってきたけど

ごめん…これは戦いだから

わたしは目をつむって

刀を振り下ろす命令をした

- バズーン -

ふう…勝った

「瑠璃ちゃん、いま回復させるからね」

「うん…ありがとう…夜水」

「そんないいよ、白呪第三十条《聖鐘》」

- ファアン -

- - - - -

第十八章五節【同時刻の分映^{マリイ}】

「わたし達も、戦わなくていいのですか？」

わたし、マリイ・エリザベスは

チームメイトの 辻 櫻 さんに聞いた

「いいんだよ、ぜってえ戦えってルールはねかったから…ククッ」

「それにマリイ様は私達を守ります。」

そんな頼もしいことを言ってくれる。シアン「そうですね。マリー姉様は私達を守ります」それに続けてしゃべる。ナタリア

「あ…ありがとうございます…で、でもあまり無茶はしないでください、ね？」

この二人の言葉はふしぎで

わたしの心に安らぎをあたえてくれる

そしたら梅俊さんが口を開いた

「それに、もう少ししたらあっちからやって来る」

「そうですか」

わたしはその梅俊さんのじょうほうを信じ

おとなしく待つことにした

続きは六巻よ！！ B y 赤羽 瑠璃

べつ、別に読んでほしいわけじゃないわよ！

- - - - - 《ただ今の生き残り》

？（×）印しは敗北者を表す

？（？）生死不明

A サイド

蒼木 周弥

灰崎 十花郎（？）

宮乃 圭介

北世 夜水

赤羽 瑠璃

B サイド

世戸峰 クリス&メイフィン（×）

阿久津 要（？）

鷹嶋 麗夸（×）

西宮 梨里（×）

黒瀬 泉

Cサイド

阿川 柳真

九澄 由

九澄 遊

天根 愛(×)

委 椿垂(×)

Dサイド

マリー・エリザベスト

ナタリア・ファミネリア

シアン・ヴェロツカ

辻 櫻

田上 梅俊

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

ウタ×カタ (五巻) (後書き)

今回はこれで終わりですが
また次回お会いしましょう (^ - ^)

ウタ×カタ（六巻）

クリスの提出作文【殺したいですわー！】

【私の出番、無かったじゃないですか？
ホントいい加減にしてほしいですわー！】

これは…非常にコメントしづらいですね。…幾つか言いながら
先生に提出するものに
こんな文句文を書かないように
あと、先生に言われても困ります。

櫻の提出作文【もんだーい】

【アンモニアを害の小さい物質に変える
？臓器はどーこだ？また害の小さい物質ってなーんだ』（読者のみ
解答権あり）】

残念ながら私は社会科の先生ですし
理科は大の苦手なのでわかりません。
それに、合宿に全く
関係ないことを書かないでください。
…？今気づきましたがこれ密かに
私にも全く関係ない作文（偽）ですね。

第十九章【集いし勝者】

………

「はい、これで大丈夫」

ん？こつちから聞き慣れた声がするな…

「ありがとう…夜水」

「どーいたしまして」

「ザッザッ」

俺が歩み寄って行く音に
夜水と赤羽は身構えした

「っ！？」

「そう身構えんなって、俺だよ」（スパー）

「なんだ…周弥か、脅かさないでよ」

「ドキドキしちゃったよ」

「…お前らは灰崎より頭いいからはしよるけど、戦うときは常に緊張しておけ」

「はい」

「そ、それくらいわかってるわよ！」

…っか

「はあ…」

「??？」

なんで主人公いないんだよ

しかも代理俺だし…

俺は額に手をあてて黙り込んだ

「……………」

「……………」

「ねえ、周弥どうしちゃったの？」

「周弥君にもいろいろあるんだよ…きつと」

「まあいい、全員集まるまで待機しとかねえと、次の作戦が無理だからな」

+

「なーんか…バラバラに片付いちまってるし…これじゃあこっちにこねえぽくね…」

そう呟く櫻さんに私は聞く

「どうするのですか？…櫻さん」

「ククッ…待つのも飽きたし、行くか」

「……………」（チャキ）

「んじゃ今持つてる写真のやつが自分のあいてな」

「わかりました…あ！あの」

「んじゃな…ククッ」

「…フッ」

私が、引き止めようとした瞬間

櫻さんと梅俊さんは行ってしまった

「…（梅俊さんと櫻さん一人で行動なのに、大丈夫なのでしょうかな…）」

第二十章【密かな使い手】

「ガァン！キーン！」

「御主…やりおるのう」

「アハハ、そうかなあ」

「三対一で無傷且つ圧倒するなんて有り得ないし…」

「それに…ずっと笑顔だ」

僕は今三人相手をしている

最初は柳真君一人だったんだけど

柳真君のチーム二人（双子）が

加勢に入って来て今に到る

「それにしても、なぜとどめを刺そうとせんのじゃろっの？」

まあ身動き出来なくして

放置してるんだから当たり前の疑問か

「いつでも出来るからなんじゃない？」

まあ…はつきり言ったらそうなんだけど

決して、エ…

「実はSだったり…」

スじゃないからね！？遊君！！

「…なるほど」

納得しないでよ！

「（仕方ない…これ以上そう思われちゃったら嫌だから、楽にさせてあげようかな…）」

嫌々ながらそう決意し

三節根を構えたとき

『魔法律第三十二項《灼水花》…』

・ボツ　ボツ　ボツ…ボツ・

「……！？」

他にも敵が！？一体いつから？

「くっ…これで終いじゃな」

「誰よ！こそこそ隠れて！」

「ずる賢いやり方だ…」

「……（僕はここでやられるわけにはいかないんだよねえ）」

・ボンツ！・

「…フン」

「……」

・ガキイイン！・

「っ！？」

あ、若干焦ってる

「やあ、こんにちは♪」

「お前…」

「僕に用かな？一年生最強さん？」

「貴様が言うか…」

「やだなあ、その言い方じゃあ僕も強いみたいな言い方だよ」

「……」（シュンツ）

「！？」

・ガアン・

「危ない危ない」

「魔法律第四十三項《天下氷塔》」

「っ！《気炎波》」

・シュボバーン・

「……ふう」

・シユキン・

「うわつと！」

さすが、切り替えし速いなあ

まあ、ついていけないわけじゃないけどさ

「……（三十八項を全詠唱破棄……それにあの威力……確かにさっき私が放った魔法は氷で、奴は氷法の弱点の火法を放った。だが詠唱がないという条件下なら火が凍って終わるはず。しかし、あれはどう見ても氷が水と帰り、そして蒸発していった……）」

……僕のほうガン見してきて恐いなあ

まあ攻撃の雨が止んだからいつか

そう僕が思っていると

梅俊君は最初と似たような言葉を言った

「やるな……」

うーん……僕の行動で何か考えてたのかな

「アハハ、そうかい？」

あんまり強いみたいなこと

言われたくないんだけどなあ

「ああ」

でも僕、さっきから

防御に徹することしか

出来てないんだけど

「……」

すると梅俊君は数秒目をつむり

双刃剣を構えなおした

「貴様の弱点……わかったぞ」

「？」

今の会話でわかった？

はつきり言って信憑性ないけど

でも発言者が梅俊君だもんなあ

ホントか嘘かわかんないや

「……」（シユン）

また高速移動か……

さつきと移動方法は

変わってないみたいだけど

- シャツ -

「おわつと！」

あれ？攻撃方法も変わってな……

- シユン - （梅俊君の移動音）

- シヤシヤシヤシヤ - （連斬の音）

「！？」

- ガガガガァン -

「危なかつ……」

「《禁》」

「くっ！」

「……」

僕を縛り付け冷静に

刃を天に振りかざす

これは……まずいなあ

「……」

「あ……はは……」

- ひゅっ -

「……っ！」

ごめん、僕は負け……を……ってあれ？

僕は恐る恐る目を開けて見上げると

梅俊君は無言でこっちを見ていた

「……」

「なんで、殺さないんだい？」

「何故殺さないだと？……ならばこちらも聞こう。貴様、何故本氣を出さない？」

「…!？」

あちゃー…なんでわかってるかなあ…

「本当はAサイドで一番強いというのに、貴様は何故それを隠す」
「それは…」

「本当の強さを隠すから、お前はさっき一度死んだ…」

「……」

「強さを隠すのは、戦士として屑のやることだ。」
む、結構なこと言うじゃないか

「いずれお前はその弱点で仲間を失うぞ」

その言葉で僕の中で何かがはじけた

「君に…何がわかるんだよ？」

「わかる…私は…」

「嘘だ!!!」

「……」

「弱点がわかったくらいで調子に乗ってないかい？なんでも軽口で
言わないほうがいいよ。僕に昔何があったか知らないくせに」

「？」

「本気を出してほしいならやってあげるよ」

「……フン」

僕は三節根を斜め上に振り回す

すると美しい青光の花波が画かれる

・フイイン！・

「……」（チャキ）

梅俊君が武器を構えたのと同時に

特別の詠唱 を吟く

「アータン・キュリー・アンマイ・チーモ・ティクサス…」

「……」

・パアアン・

「!？」

「さあて…始めよつか、梅俊君？」

「っ！？（ゾクッ）」

「《神裁の十字架》…」

「！」

・ガシユン・

「この技はなんだ？聞いたことが…」

「…（ニヤッ）」

「民が王へ逆らえば命はない…」

王が民を救わねば地位はない

幾千の関係…それは神の造りし深紅の鎖

黒と朱の軌跡を描く！…」

「続技黒呪《鬼神の制裁斧》！」

・ズズズズ・

「なん…だと！」

「これが……僕の本気だよ」

・ズガアーン・

「……………」

『いずれお前は本気を出さなければ、仲間を失うぞ』

「…そんなこと言われてもなあ……………」

確かに僕が弱気でいつて負けて

僕が弱気でいったのが原因で

仲間を失うのは厭だけど…けどなあ

……………ハア、まあいいか

今のままで行こ

・……………

第二十一章【演舞・最終節】

「なかなか…美しい動きをするじゃないか、灰崎君も」

「うるせー…」

くそが…

久々の俺（主人公）登場なのに

マジ萎える状況だぜえ…

っーかなんだよこいつ…

ホントに魔法使いかよ

性格に似合わず

攻撃手段が派手なんだよ…！

「あれ？何故か萎えてるみたいだね？」

「あたりめえだろ…だっ…！？（ゾクッ）」

この感じは…なんだ？

何か恐怖の様なこの感じは…

「だっ？だっ、の次は何なんだい？」

もしかして！

（ニヤッ）

…ビュン！…

「避ける！あぶねえ！」

「！？」（シュン）

「おいおい、なんで教えたんだ？せつかくの殺すチャンスだったの
によ…ククッ」

正体は櫻か

まあ大体予想は出来てたけど

「ふっ、滑稽だね。僕だって君が近くにいたことはわかってたさ」

「ホントかよ…さっきビビってたじゃん」

「ふふっ…そんなわけじゃないか、あんなに殺気を振り撒いて
いたら気づくだろ？」

「嘘っけ…」

「灰崎が狙いなんだろうけど、僕に攻撃したってことは…君は僕の
敵だ」

「ククッ…」
「…だったら何だってんだ？」

「俺のことは、ガン無視かよ?？」

「当たり前じゃないか」

「いい度胸じゃねえか?？」

「ブオン」

「えっ?」

「ガキイン」

「……………」

「ククツ…あぶねえじゃん?」

「あぶねえとか言いながら、余裕な顔してんじゃねえ…つよ!」

俺は一旦、相手を後ろへ弾き
要に近づく

「なんだい…?」

「そう嫌そうな顔すんなって」

「嫌じゃないけど…」

いや、明らかに嫌そうな顔してんじゃん!!

けどこの様子だと分かってるな

「ここは…どうだ?」

「そうだねえ…一対一は面倒だし、僕の顔にむかって攻撃を仕
掛けた」

「俺も櫻+お前はきちいし、あいつに狙われてる」

「だったら…」

「まあ、あんまり気乗りしないけど…」

「「今だけ味方だ(だよ)」!」「」

これなら櫻に楽勝で勝てる

んでそのあと要をぶっ倒してやる

「……………」

「どうした?恐すぎて声もでねえか?」

「…(恐い?お前らが?)」

「ふふっ、醜いなあ」

「ククツ…ククククツ！クヒヒヒヒ」
「「？」」

「…お前ら、頭大丈夫け？」
「すげえ悪気のある笑みを見せながら
トンファを振ってくる」

「カイン」
「アーロク・サ・ハーツ・ミツツア」

「！？」

「シュボン」

「危ない危ない」

「よそ見してんじゃねえ…つよ！」

「ああ？」

「ガアアン！」

くその後ろからの攻撃も

ギリギリでガードかよ！

「ククツ、よそ見してんのはお前じゃね？」

そう言っていると櫻は

指をパチンと鳴らし

「ばあーい」と言って

俺の武器を蹴って

俺を数メートル飛ばした

「何がしてんだよ？」

「ククツ…死体は黙れって」

この野郎？

「っ！？灰崎！危ない！！」

「は？」

危ないも何も

俺の回りに警戒するもんあるか？

「死にたいのかい？！とにかく横か後ろに避けなよ！！」
前は駄目なのかよ？

「やめろって、もう死ぬから」

「んだとてめえ!？」

「だから前は駄目だって!」

「ズブツ」

「へ!？」

「ボンツ!」

.....

《キキキツ》

「murder・party>殺人団体<…僕のお気に入りだよ?」

「サンキュ、助かったぜ」

「これで貸し借りは無しだよ?」

「ああ」

ん?貸し借りは無し?

「つーことは、やっぱあれ気づいてなかったんだろ?」

「…何か、言ったかい?」

「な、なんでもありません…」

くそ、あくまでも

櫻の気配に

気づいてた設定にしてえのかよ

「あゝもうキレた…ちょこまか動いてうっとーしい」
そう言つて

俺と要から十メートル程離れた所で

武器を構え始めた

何をする気なんだ?

明らかに届かねえだろ

「ビュンツ!」

「ぐっ!」

「か、要!?!どうして切り傷が」

「お前もよそ見すんなって」

そう聞こえてくるなり

俺の背中に激痛が走る

「ぐああ」

何がおきてんだよ!?

「ククツ」俺の本当の武器はトンファ本体じゃねえんだよ。俺の本当の武器はトンファに仕込んだチエーンナイフなんだよ」

「ジャラア……」

「executioner・Maria>暗殺者マリア<……」

「？」

「シユカカカカカ!」

「!?(なにかが刺さる音じゃね!?)」

「ふっ……終わりだね」

決まった……のか?

「……………」

「……………」

「……………」

あれ?なんにもおこんねえ

「ククツ……クククク!何もおこんねえじゃねえかよ?」

「カラン……カラン」

「おいおい……マジで?」

「す、すげえ……何したんだよ、要」

「ふふっ……内緒さ」

さすがに技は教えてくんねえか

今だけ味方なんだもんな

くそ、弱点探るチャンスかと思っただのに

「くああ……マジでヤバ気」

「ふふっ、武器もなく今の状態の君は、もう戦えないんじゃないのかい?」

確かに、あの細腕じゃあ素手は無理だろ
でも櫻はしつげえからな

簡単に降参は…

「……あゝ、わかったわかった…降参…」

……簡単にしやがったよ…

「んじやな、十花郎…ククツ」

要もいるんだけど…

なんで俺だけ？

「まあいいぜ、それより要…再戦だ！」

俺は要に巨断剣を構えたが

要はそれを優しく跳ね返し

「その必要はないさ」

「あ？どういう意味だよ？」

「ふふつ、そのまんまさ灰崎君。」

…！？まさか櫻に仕掛けた魔法

密かに俺にもしてたのか

けど俺はあいつみたいにもやし男じゃねえ

「フリイけど、腕っ節にも自信があるぜ」

「…よく見なよ。君の武器壊れてないじゃん」あ、えッ！？じゃあ…

「俺の…勝ち？」

「そうだよ」

「なんでだよ、まだお前ピンピンしてんじゃん」

すると要は、君は馬鹿かい？

というような顔をして言ってきた

「最後に出した二つの技は結構精神使ったよ。だから今、僕は立

ってるのがやつとって状態だよ」

「そうだったのか…」

「まあ、そういうことだから…じゃあね」

「あ、ああ…」

……俺、勝ったのか？

なんか…ビミョー…

七巻に美しい続きがあるよ by 阿久津 要

(まあ、僕は出ないけど…↑)

――――《ただ今の生き残り》

(×) 印しは敗北者を表す

Aサイド

蒼木 周弥

灰崎 十花郎

宮乃 圭介

北世 夜水

赤羽 瑠璃

Bサイド

世戸峰 クリス&メイフィン(×)

阿久津 要(×)

鷹嶋 麗夸(×)

西宮 梨里(×)

黒瀬 泉(×)

Cサイド

阿川 柳真(×)

九澄 由(×)

九澄 遊(×)

天根 愛(×)

委 椿垂(×)

Dサイド

マリー・エリザベスト

ナタリア・ファミネリア

シアン・ヴェロツカ

辻 櫻(×)

- 田
- 上
- 梅
- 俊
- (x)
-)
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2706r/>

ウタ×カタ

2011年10月8日19時58分発行